【教育実践報告】 歴史総合事始補論—「過去と現在の対話」を試みる—

新 嶋 聡（地歴公民科）

要旨：拙稿「歴史総合事始—『歴史の学び方』とは何か—」の続編である本稿は、中央大学杉並高等学校における2022年度3学期の歴史総合の実践を振り返ったものである。冷戦期を扱った3学期の学習内容は現在に直結する事例が多い。そのため、筆者は生徒たちに「可能性と限界」を考えさせる問いを示し、過去の出来事が現在の出来事の規定要因になっていることを生徒に考えさせて授業を展開した。その結果、生徒たちは「過去と現在を繋げて考える」ことが可能になったと考えられる。加えて、通年の授業を通して、生徒たちの中で「歴史を学ぶ意義」について自分なりの考えを示せる生徒が出てきた。これこそ「歴史の学び方」への「解」だ。

はじめに—「過去と現在の対話」について—

本稿は、2022年度に中央大学杉並高等学校の第1年次で開講された「歴史総合」の3学期における授業実践を振り返るものである。筆者はかつて「歴史総合事始—『歴史の学び方』とは何か—」¹にて1・2学期の実践を振り返っている。そのため本稿と前掲拙稿とを併せることによって、2022年度の歴史総合の学習実践の概要を掴むことが可能となるだろう。

さて、本稿で対象とする時代は、1945年から1989年の世界情勢、つまり、

¹ 詳細は、拙稿「歴史総合事始め—『歴史の学び方』とは何か—」『紀要』第32号、73-106頁。

冷戦下の世界である。冷戦期に何が生じたかを知ることは、現代の社会で生じている出来事を考える上で、大きなヒントを我々に与えてくれよう。だが、3学期は入学試験の実施に伴い授業時数の確保が難しい。そのため、3学期は「冷戦期の日本については最終レポートで扱う」、「授業では世界情勢を中心に扱う」方針を採用し、授業を実施した。

なお、本稿執筆時（2024年3月10日）で、スウェーデンがNATO（北大西洋条約機構）に加盟することが決まり、「NATOの役割が冷戦時代に逆戻り」と見出しについた報道がなされている²。皮肉なことに、2022年度3学期の学習内容は今日の世界情勢を考える上での「補助線」を与えてくれるものとして機能することとなったと考えられよう。

このような状況も鑑み、筆者は本稿の副題に「過去と現在の対話」と添えた。周知のように、この言い回しは歴史家E.H.カーの著書『歴史とは何か』で登場するものである³。過去を学ぶことを通して、現代の世の中を考えてもらいたい。副題にこのような思いを込めていることを述べておく。

以下、本稿では①国際連合、②デタント、③冷戦の終焉を例に、生徒たちがどのようにして「過去と現在の対話」を試みたかを紹介していきたい。

1. 3学期の実践例①—国際連合—

本章では、国際連合を例に取り上げた生徒のリアクションを紹介したい。冬休みの課題として、国際連合について考えてもらった。教科書（山川出版社の『現代の歴史総合 みる・読みとく・考える』）136-139頁の記載事項を読んだ上で、「1945年10月に創設された国際連合の可能性・限界は何か」という

² 「NATOの役目が冷戦時代に逆戻り、スウェーデン加盟で32カ国・兵員331万人・国防費156兆円の巨大軍事同盟に」
(<https://news.yahoo.co.jp/articles/ec3dc76136941a107fcf24d89ad86c5fff81ba072024/3/10>閲覧)。

³ E.H.カー著、清水幾太郎訳『歴史とは何か』（岩波新書、1962年）。本書は2022年に近藤和彦によって新たな翻訳版であるE.H.カー著、近藤和彦訳『歴史とは何か新版』（岩波書店、2022年）が刊行された。

「問い」を設定し、「解」を導いてもらった。2学期の学習範囲である国際連盟についての確認・発展学習でもある。以下、可能性と限界を、数例ずつ抽出してみたい。

(A-1)

・可能性

- ①連盟の全会一致とは異なり多数決なので承諾が得られやすい
- ②そもそも193カ国もが集まって話し合える場があるということ事態が重要(限界があるかもしれないけどなかったらどうしようもない！)
- ③国連総会がある！安保理が機能しないとき、過半数の要請で総会が緊急会議を行うことができる。つまり拒否権を出されたら無力というわけではない。

・限界

- ①常任理事国は拒否権があるのでいずれかの国が反対すれば安全保障理事会が動けない(今だけでなく米ソ冷戦時にも拒否権の行使で安保理が麻痺状態だった)
- ②国連総会があっても国連総会に拘束力はないので決定打にはならない。

(A-2)

・国際連合の可能性

国際連盟での反省を生かして、軍事力を行使できるようにしたこと、常任理事国に拒否権を発動する権限を与えたこと、全会一致を採用しなかったことが改善された。さらに、経済社会理事会・国際司法裁判所などの機関を持ち、国際労働機関（ILO）や、国連教育科学文化機関（UNESCO）などをその専門機関とした。国際連盟の頃と比べて、組織が増え、複雑になった。大国であるアメリカが参加したこと。

・国際連合の限界

安全保障理事会が機能するかどうかについて。常任理事国になっている大国が敵対したときに機能することが難しいのではないかと。拒否権の発動が少し強すぎる??武力制裁に踏み出す国が少ない。日本では多分しないし、アメリカとかもおそらくうごいてくれないような気がする。武力制裁した意味はあるのか。経済制裁で結局変わらない。経済制裁にしてもうまく制御できるかはわからない。その国は少なからずダメージを受けるかもしれないが、完全に制御できるかはわからない。国際連合では大国のちからが大事になってくる。彼らの協力が得られなくなったとき崩壊するのではないかと思う。

(A-3)

昨今のロシアによるウクライナ侵攻、クリミア併合、スエズ危機などにより国際連合というものの課題、限界が浮き彫りになってきている今日。私達は「国際連合」というものについてよく考える必要があるように思える。

そもそも国連とは、ある意味で単なる主権国家間の機構である以上に、ファシズムと戦って民主主義と人権を守り通した連合国が、再びファシズム勢力が台頭して世界平和を侵害することを防止するために作られた、平和と民主主義を守るための国際組織である。それに一口に国際連合といっても、様々な機関が存在しその実態はかなり複雑である。

その上で、国連の問題点をざっくりばらんに挙げるとするならば、安保理常任理事国の拒否権、機能性が極めて低い司法機関の2つが挙げられる。これらについてひとつずつ詳しく考えていこうと思う。

まずは、大国の拒否権についてだ。拒否権については「中小国に対しては国連が強制行動を取れるのに、大国に対してはそれができないというのは不公平ではないか。平和を侵害する恐れがあるのは、小国ではなくて、大国なのだから」という意見があるが、国連はその創立当初から、大国に対して強制行動を取れるようには作られていないのである。

第二次世界大戦の反省を生かし、これからの戦争はぜひとも大国の協力によって防止すべきだという願望の中から生まれたのが国連である。であるからして、大国の全部が互いに協調して、拒否権乱用などの事態を起こさないだろうという期待と展望が、国連のそもそもの前提になっているのである。しかしながら、世界の国々の拒否権に対する反発は多い。拒否権は大国の覇権そのものであり、優越性と特権の権化である。これは主権国家の平等という理念と明らかに矛盾し、国際レベルで民主主義を適用するには最大の障害であるからだ。第二次大戦の勝者が自分たちだけの特権を持ち続けるなら、国や個人の間の実の対話は不可能である。

そして次にあげるのは、国連組織の中の司法機能の役割を果たす国際司法裁判所についてである。国際司法裁判所は、加盟国間の紛争を処理し、加盟国はその判決に従う義務があることになっている。また、国連総会や専門機関の法律問題に勧告的意見を出す。しかし、国家の国内裁判に比べると、司法機能としては壊滅的と言っていいほどに弱い。それは、国際司法裁判所が裁判を行うためには、当事国全部の同意が必要だからだ。

自国に不利な判決が予想されるにもかかわらず、裁判の開廷に同意する国は少ない。武力紛争であればなおさら侵略国が裁判に応じようとはしないはずである。また、この裁判所が判決を下すにあたって適用する確たる法律も存在せず、下された判決に強制力がない。つまり、「被告」や「犯人」に対する強制的な罰がないのである。また、国家を刑務所に送ることはできないし、賠償金を支払わせる手段もない。国家は、国際司法裁判所の司法権を拒否することができるし、さらに、司法権を認めたとしてもその判決を受け入れないこともできるのである。こんな仕組みでは裁判所としての機能を果たすわけがない。

これらのことから将来的に見て国際連合には期待できる可能性はまったくなく、限界が来ていると思われる。国際連合が今のままである以上国際社会に未来はないだろう。

回答は、概ね前述の3つに分類できよう。A-1のような解が、模範的なものである。A-2のような解が、「国際連盟の反省を踏まえて国際連合が創設された」点を踏まえた解である。そして、一部の声の大きい者が主張しがちなものが、A-3である。確かに、指摘されている点は的を射ているものが多い。だが、「可能性はまったくなく」という点には、以下の点から正面から別の視点を提示しておきたい。①国際連合には世界に196存在する主権国家のうち193(98%)が所属している。国際連合以外に、これだけの主権国家が加盟している国際組織があるのだろうか。②①と関わるが、「可能性がまったくない」という理由で国際連合を解散することは安全弁がなくなることを意味し、世界がよりアナーキーになるのではないか。③では、どのような手段・組織をもって「可能性のあるもの」を創設できるのだろうか。このような反論に対して、どう答えるだろうか。

筆者は基本的に個人の意見を否定することはしないが、時に自身の意見をぶつけたくなくなることもある。そのため、現状を全否定するものについては、思うこともある。確かに、現状を見れば(無力感に駆られてだろうか?)全否定をしたくなる気持ちは、分からないことはない。だが、悲観的な意見を述べるだけでは何もできない。一方、A-3には「限界が来ていると思われる。国際連合が今のままである以上国際社会に未来はないだろう」と、現状を改めようとする意図が垣間見られる。そこに、筆者は一縷の希望を見出したい。この学びを経て筆者は、「別の機会、例えば高校3年次の政治・経済の授業で考える時間を設けていきたい」と強く決意した。

以上が、国際連合の可能性と限界について考えた課題についての振り返りである。次章は、冷戦の変容についての課題について振り返りをしてみたい。

2. 3学期の実践例②一軍拮競争から緊張緩和へ

本章では、冷戦の変容について、核軍拮と核軍縮、緊張緩和(デタント)を素材として、1960年代から70年代にかけての世界を考えてもらった。教科書

の180-183頁を学んだうえで、「核兵器の可能性と限界は何か」と、物議を醸す「問い」を投げかけた⁴。以下、可能性と限界を、数例ずつ抽出してみたい。

- ・核軍縮を完全に遂行するのは不可能であり、ある程度の核は抑止力として必要だと考える。今回のロシアとウクライナの戦争ではロシアが核を使用する可能性ちらつかしていたがアメリカなども核を持っているため核を使えば使われる可能性があるため脅すだけで使われることがなかったのではないかと思った。しかし核を拡散することは禁止するべきだと考える。なぜなら独裁的な小国が核を持てば他国の核が抑止力として機能しない可能性があるからである。(B-1)
- ・核軍縮の可能性/メリットとしては、1つ目、数が減ると核兵器の保持管理に掛かる費用が減らせる。運搬用の航空機やミサイルそして、それを保管する基地の数が減らせるしその分の人員も削減できる。核物質含めて整備する量も少なくなる、その結果それにかかる費用が減る。2つ目は、数が減ると管理しやすくなること。関わる人間が減るので偶発的な事故の危険性も減らせる、兵器保管場所も減らせる、盗まれる危険性も減る、敵対国にとっても監視する対象が減るのでお互いに楽になる。3つ目は減らすと表明しただけである程度の「平和アピール」をすることができる。もし、北朝鮮のように核軍縮をしなかったりしていたら、日本国の信用は地に落ちる。その結果制裁されずとも日本円は価値を失い、北朝鮮並みの最貧国となる。

核軍縮の限界は存在する。現状において自国だけ大幅に軍縮すると、かえって周辺地域の力の安定を損ね、紛争を誘発させることが多い。他にも例えば、何かしらの理由で戦争が勃発したとして、相手が、戦況をいつでもひっ

⁴ 明言しておくが、筆者は核兵器の存在を肯定しているわけではない。この問いは「何故、為政者たちは核兵器を手放す選択をしなかったか」を考える上で必要なため設定したものだ。

くり返せる強大な兵器を持っていることは大きな脅威となる。特に北朝鮮のような国は追い詰められたとき、本当に使いかねない危うさがある。核保有国同士の戦争では、核のやり取りに繋がり悪いことが起こることは間違いないが、一方しか保有していない場合も、相手国に大きなアドバンテージを持たせることになる。核保有国とその同盟国同士の戦争でない限り、経済制裁等はあるとしても、核を使用されてしまい、なにも抵抗できなくなってしまう。(B-2)

- ・冷戦によって武器が必要になったことにより、核兵器の質が対立の要となった。世界の諸国にとって冷戦は「核兵器」というものを今までより身近にした。第二次世界大戦で日本は広島と長崎に原爆が落とされ、多大な被害を受けたことにより、日本国内では核兵器の恐ろしさを伝えていく風潮が生まれた。しかし、日本は世界の中で唯一の被爆国、つまり他の国にはほんの被害を見て恐ろしいということは見てわかっただろうが日本ほど核兵器に対する危機感はない。それは反核・平和運動が世界に広まった頃も核開発は進められていたということからわかる。核兵器は低コストで相手に大きな被害を与えることができ、また、核を使った原子力発電は人口が多く、人々の発電に大きなお金を使いたくない国にとってはピッタリな発電方法だろう。現に、アメリカやフランスは原子力で発電を賄っており、今や必要不可欠なものになってしまっている。平和な世界を作る上で核兵器はなくなるほうが好ましいが、日本のように被害をもろに受けた国でない限り、核を完全に廃止することは不可能ではないかと思う。(B-3)

平和教育を進める上で「核兵器は廃絶すべきもの」という前提で話を進めていくべきであることは、筆者も重々承知している。だが、ウクライナでの戦争を目の当たりにしているからこそ、生徒たちは「現実的な」考え方に傾斜しているのではないか。そういう思いを抱かずにはいられない。B-1からB-3すべてに共通している点は「現実を見た上での意見」という点だからだ。

一方、核軍縮そのものについては否定的な意見は見られなかった。例えば、B-1であれば、「核を拡散することは禁止するべきだと考える」という指摘である。また、B-2であれば、「現状において自国だけ大幅に軍縮すると、かえって周辺地域の力の安定を損ね、紛争を誘発させることが多い」と、力の均衡性を保つ必要性を理解している点である。そしてB-3であれば、「第二次世界大戦で日本は広島と長崎に原爆が落とされ、多大な被害を受けたことにより、日本国内では核兵器の恐ろしさを伝えていく風潮が生まれた」と、唯一の被爆国である日本の状況を理解している指摘があるからだ。軍縮についてのコンセンサスは、確かに存在しているのである。

とは言え、B-3で「核兵器は低コストで相手に大きな被害を与えることができ、また、核を使った原子力発電は人口が多く、人々の発電に大きなお金を使いたくない国にとってはピッタリな発電方法だろう」とあるように、冷戦期において核兵器による「恐怖の均衡」が存在し、アイゼンハワー大統領が「平和のための原子力」演説を行ったことは事実である。これらから、「為政者がどのような目で核兵器をとらえていたか」は、予測ができたのかもしれない。

では、「核軍縮を達成することが可能となるのか」という命題について、どのような文法で、どのような視点で考えさせていけばよいのか。本章で触れた「問い」は、筆者に大きな課題を与えた。我々も学び、時にプレーヤーとして議論に加わる必要があることを示したと言えよう。次章では、冷戦の終結について確認してみたい。

3. 3学期の実践例③—冷戦の終焉とソ連の崩壊—

ゴルバチョフ書記長の登場からマルタ会談までの過程を素材として、冷戦の終焉について考えてもらった。教科書218-221頁を学んだうえで、「冷戦の終焉は、ソ連およびロシアに、何をもたらしたと言えるだろうか」という「問い」を投げかけた。以下、数例を抽出してみたい。

- ・冷戦の終焉には、ソ連のゴルバチョフ書記長が関わった。最終的にゴルバチョフはアメリカのブッシュ大統領とのマルタ会談で冷戦の終結を宣言することになるのだが、そこに至るまでの過程で、主に経済面と外交面での新政策を矢継ぎ早に行った。経済面では企業活動の自由を拡大し、個人営業の自由を認める改革を行い、外交面では西側諸国との関係改善を模索し、軍事費の財政負担を削減しようとした。また、貿易赤字、財政赤字という双子の赤字に苦しんでいたアメリカ合衆国とともに画期的な核軍縮を実現するなど、これらのような影響をもたらした。終焉後は、民主主義と市場経済を実現したものの、経済再建に苦しむこととなったが、その後資源輸出などによる経済成長を実現した。しかしウクライナ東部のロシア系住民の分離運動で、ロシアは軍事力でクリミアを併合し、国際的非難を浴びてG8からも追放された。それが今も続く戦争に繋がっている。(C-1)
- ・冷戦の終焉によってソ連は土地を失った(独立した国が増えた)が民主化は成し遂げられた。また、ロシアはソ連時代のアメリカと対立する相手という立ち位置から、一時的に支援される側になった。しかしそれは一時的なものでロシアはソ連時代の栄光(ソ連側からしたら)を取り戻そうとしました。クリミア侵攻・ウクライナ侵攻もその一例です。これはソビエト社会主義共和国連邦であったのがロシアだけが残ってしまったという思いもあるのかなと思いました。(C-2)
- ・ソ連とアメリカの疲弊が冷戦の終焉に繋がったため、冷戦の終焉はソ連の勢力の減少の証明になっていると思う。その後バルト三国、ウクライナが独立しソ連が解体したり、NATOが拡大したり、ソ連が経済再建に苦しんだりしているためロシアの権力はさらに小さくなっていると思う。しかし、核保有の権限はロシアにあるままで、アメリカの支援を受けて経済的にも回復しつつあるロシアは依然として脅威なままであるとも言える。よってロシアにおいてウクライナはもともとロシアものだったのにとこの思考が残り現在の戦争に繋がってしまっている。つまり冷戦の終焉はロシアに

勢力の縮小からの戦争で回復したいという思考がうまれてしまったきっかけになったと思う。(C-3)

あらかじめ申し上げておくが、筆者は眼前で生じているウクライナ戦争において、ロシア側を擁護する意図は全くない。今回の「問い」の意図は、「なぜ、ロシアがこのような事態を引き起こしたか」を知る上での、課題設定である。誤解を生じないように、明言しておく。

さて、C-1からC-3で指摘されているように、「冷戦で『勝利』したアメリカと異なり、ロシアは『敗北』した」がゆえに、『復権』に至ったのではないかと推測できる。この授業では、冷戦期のソ連と冷戦終焉後のロシアの国土を地図で比べた。そのため、ロシア内部でどのような考えが生まれたかを推測することが可能となっただろう（だからと言って、ウクライナ侵攻が正当化されるとは言えない）。

本稿の冒頭で触れたスウェーデンの例ではないが、「実は、冷戦という二極構造の方が、J・L・ギャディスの指摘したように「長い平和」だったのではないかと考えてしまう。やり場のない怒り、もどかしさを感じる実践となってしまったのが、悔やまれる。次章では、まとめを試みる。

4. 「過去と現在の対話」の可能性について

本章では、3学期の事例をもとに『過去と現在の対話』の可能性についてを考えてみる。

結論から言うと可能である。だが、「明るい未来だけを考えることにはならない」という、制約が存在することも明らかになった。いずれの実践においても、「過去を踏まえて今を考える」ことは十分に出来たと思われる。だが、眼前で生じている出来事を目の当たりにすればするほど、「同じことが繰り返されるのではないか」という不安を与えかねない。また、現実には引きずられすぎて、「過去に生じた出来事をどう改めて、理想的な状態に近づけていく努力を

したか」を考えられなくなる事態は避けなければならない。このような課題が浮き彫りになったことも事実である。

どのレベルまで「対話」をするかは授業を实践する我々の力量次第であるが、「過去を振り返ることによって、今の世の中について目を向けさせる」ということは、十分に可能であることを筆者は実感できた。これが、3学期の实践で得られた結論である

5. 1年間の総括に代えて一生徒からの自由記述

筆者だけの総括では一方通行であるため、生徒の考えを紹介する必要がある。そこで、3学期は課題レポートと併せて、任意で「この1年間の学習での感想など、ご自由にお書きください」という項目を設け、生徒の率直な感想を聞く機会を設けた。任意であるにも関わらず、率直な感想（や意見、建設的な提案）を書いてもらった。多くなってしまいが、紹介してみたい。

5-1. 授業そのものに好意的な感想(主としてグループワークについて)

- ・歴史は僕自身のイメージとして先生の話をして永遠に聞いて、このようなことがあったのだと表面的に理解する教科だと思っていました。しかしこの歴史総合ではグループワークを通じて自分たち自身でなぜこのようなことが起こったのかを因果を明確にして学んでいくものでした。なので今までの歴史の時間とは比べ物にならないくらい面白い教科でした。更には疑問に思ったことを毎回先生がその時間に答えられるものは答えてくれる形式がとても良かったです。その時間内で自分の疑問が一つ減ると今後の授業への取り組みがしやすいなと感じていました。来年もこの教科を受けられるのかはしらないのですが、もし受けられるようだったら一年生での学びを生かしてさらなる発展に繋がりたいと思いました。(D-1)
- ・中学校までの歴史の授業はいつも先生の話をしてきくというよりは、睡魔と1時間戦い続けたり、必死に板書を写したり一日の中で社会があるとどるい

なーと思うような存在でした。しかし高校に入って1発目の授業で「先生は授業の半分も話すことは滅多にしない」という言葉に衝撃を受け、日々の歴史総合の授業はお世辞とか媚びを売っているとかではなく、本当に楽しめました。グループワークで自分の意見をまとめる際に、自然と教科書に目を通しそこに書いてあることを理解してから自分の言葉に置き換える。これだけでもなにかと知識は入って行って、テストでも勉強した分だけ点数を取ることができる、この快感を味わえた歴史総合。本当に楽しくたくさんのお話を学びました。(D-2)

- ・グループワークを通して、教科書だけでは拾いきれない事実についても他の人の知識を借りながら深く考えることができた。一つひとつの課題について掘り下げることで関連性のある話題を引き出すことができ、歴史を学ぶに当たって大切である流れをしっかりと抑えることがしやすかった。また、同じ課題をいくつかのグループで共有することで自分たちがフォーカスを当てなかったところについてもまとめられているわかりやすい知識を詰め込むことができたことがグループワークをやったメリットだったと思う。(D-3)
- ・中学の時から歴史は自分で考えてから順序を追って覚えるっていう形が定着していたから、高校に入って授業のイメージが変わったとは思わなかったけど中学でやってきたことを前提として更に深いところまで突っ込んで覚えなくちゃいけないのでちょっと大変だった。ただ前時代的な年号と用語を覚えるだけでなく考えるっていう工程が入ることで覚えやすくなったと思う。(D-4)
- ・中学では学ばなかった細かい理由、関係などが高校では学べてこんな理由があったからなんだと思えたり、なんでこうなった？を気づいたら追求できるようになりました。(D-5)
- ・私の通っていた小学校では討論をしながら学ぶ授業が多かったのも、歴史の授業形式が小学生時代を感じるようなとても懐かしい授業で楽しかった

です！1年間ありがとうございました。(D-6)

- ・中学と比べて、高校の歴史では一つ一つの出来事をより深く勉強しました。また、この歴史総合の授業はグループワークの時間を多く取り、友達と意見を共有する機会が多くありました。そのため、様々な視点から出来事について学べたことで、知識だけでなく、想像力も身につけることができたと思います。僕はそこまで歴史という教科は得意ではなく、あまり好きな方でもなかったけど、グループワークなどを通すことで段々と興味が湧き、「もっと知りたい」という気持ちが出てくるようになりました。来年は今よりももっと頑張りたいと思います。(D-7)
- ・過去の学習が次の学習に繋がることも多く、知識のみの歴史ではなく関係を学習する歴史の授業だったと感じた。この1年で、教科書の太字のみが大事なのではなく、その理由が書いてある部分が大事なのだと実感した。(D-8)

5-2. 苦労話や意見、課題を明示してくれたもの

(授業を進めるにあたっての苦労話)

- ・はじめはグループワークで発表をするとなったときにとても緊張したけど、今では発表も嫌じゃなくなってグループワークが楽しく感じるようになりました。(E-1)
- ・高校での歴史の授業はグループワークが多く、クラスメートと意見共有の場がたくさんあり自分が気が付かなかった点や新しい視点で歴史について考えることができとても面白いなと思った。また、中学の時より新しい単語が多く、更に掘り下げられた学習ができたのが興味深かった。レポートや授業後のフォーム入力などでは、歴史の流れを上手く言語化するのが難しかったなと思った。(E-2)
- ・今までやったことのない授業体制で、最初は自分たちだけで考えるのが大変だったけど、今はより授業の理解が深まるのでとても楽しく受けられて

います！だけど、自分が調べてないグループのところの問いについては発表を聞いても理解しきれないところがあるので、やっぱり大変でした。

(E-3)

- 中学の頃と違い語句の暗記をする科目ではなくなっている。グループワークが多く異なる意見が知れるのは興味深い。ただ知識がない分考えづらいという面もある。ネットなどを使い補う必要があったり、前の内容を復習する必要があったりと、自主学習の時間を増やす必要があるように感じた。

(E-4)

- グループワークで自分以外の意外性のある意見を聞くことができるのがとても良いと思った。グループで作業しているとわからないことがあればすぐ他の人に質問することができるのでありがたかった。しかし、自分のグループ以外の発表については理解が深められないのでテスト勉強の際に困った。だいたい3グループ程度に別の質問が与えられるので教科書の三分之一は理解しているけれどそれ以外は理解できていない感じだった。先生の座学はとてもわかり易くて助かりました。(E-5)

- 歴史のグループワークはとても良いやり方だと思った。しかし、議論して考えて、正解を導き出すという方法ではなく、歴史が得意な人に全て任せて、議論に参加しない人がいたりして少し違和感を覚えた。(E-6)

- 中学での歴史の授業は教科書をなぞるだけのものだったので、高校に入ってから歴史は本当に難しかった。元々与えられた資料からあれこれ繋げて考えるタイプではなく、字面通りに受け取って考えずに終わってしまうタイプなので、自分で答えを探すのは大変だった。そのためグループワークとしてお互いの意見を交換して、そこから考えを作っていくことをとても大切なものだと感じる事が出来た。(E-7)

(試験に関する苦労話)

- 世界史分野が覚えることが多くて大変だった。(E-8)
- テスト直前で詰め込むことが多くテストに間に合わないことが多かったの

で、毎日の復習を少しでもいいからできるようになりたいなと思った。

(E-9)

- ・正直なところ、校内外に関わらずテストで問われるのは知識が主なので、授業内でもそういった面で補完があると個人的にはより助かります。

(E-10)

- ・テストで授業で扱った問題（いわゆる思考問題）も入れてみてほしい。授業でのその場限りのアウトプットになっていて、知識系の問題が大切なのは分かるが、なんかもったいない気がした。（上から目線っぽくなってすいません）(E-11)

(授業の進め方に関する提案)

- ・この一年の授業を通して授業形態に関して思った点が良い点と改善点で一つずつある。良い点のほうは、グループワークが多く眠ることなく授業を過ごし、たくさんの人と意見をたくさん共有できる点だと思う。改善点としては中学校の歴史の授業と比べた時に中学の歴史担当の先生はグループワークと座学を一枚のプリントでまとめ、ノートに直接貼る、穴をあけてまとめることができるようにしていた。さらに座学のプリントが穴埋め形式であることによって生徒と話しながら次の内容を考えるなどして、授業中にも単語を覚えることができるようにしていたし、グループワークはまとめて一回で行うのではなく授業の中でも内容に分かれて何回か数分考える時間としゃべる時間を作って、すべてに触れられるようにしていた。時間を取らない分近くの人に絞りつつも毎回授業開始前に乱数で席替えをおこないメンバーを変えるなど工夫をし、様々な人の意見を聞くことができた。(E-12)
- ・グループワークをして、様々な意見に触れることは、学びの価値をより良いものにする、多角的に物事を考えることに役立つと思う。しかし、正直な所、知識を定着をさせることがあまりできず、なんとなくしか理解できないということがあったと思う。また、自分たちのグループで話し合っ

ていないことについてはあまり理解ができていなかった。そのため、1週間にある2回の授業のうち、1回目を知識事項を先生に説明してもらい覚える授業にして、2回目の授業を1回目の授業でやったことをもとにして、グループワークをする時間にして欲しいと思った。グループワークの時間が現在の半分になってしまうが、現在のように2班が同じ内容について話し合うのをやめれば、1時間で現在の倍の量の話題について話し合えるから、授業の速度なども問題ないと思うし、基礎的な内容を1時間目でしっかり理解すればより高度な価値のある話し合いができるようになると思う。

(E-13)

5-3. 歴史を学ぶ意義について考えてくれたもの

- もともと歴史はかなり好きな教科で勉強していて暗記するのは難しかったけど、今まで見たことのない資料やそれを読み取ることによって今までには考えたことない裏側や詳しい戦争の原因など、知っていくうちに昔にそんな事があったのか！！とモヤモヤがなくなったり、全範囲が終わったときには過去と今が繋がってなんとも言えない感覚になった。自分たちの祖先は戦いや飢饉など様々なものに打ち勝って今まで世代を繋いできたということを見ると歴史は学ぶだけ学べて限界はまだないんだなと思った。

(F-1)

- 中学生の頃の日本史、世界史が独立せず融合した形の歴史総合は、までの歴史の中で日本が海外からどのような影響を受け、また与えていたのかがわかりやすくなったと感じた。今まで起こった事例の中で、様々な資料を通して考察を考えることで印象に残りやすくなったと思った。(F-2)
- 世界で起こったことと、日本で起こったことを別々に考えがちだったが、一緒に考えることでなぜこの革命が起こったのかなどの疑問が解消されるようになった。(F-3)
- この1年歴史総合の学習をして、小学校や中学校で学んだときよりもより

深い内容を学ぶことができたなと思った。今までなんとなくは知っていたけど、ここまで詳しいことは知らなかったということが多かったので、知識を増やすことができて良かった。また、昔あった出来事が今の社会にも影響していることなど、今後役に立つことも知ることができ、楽しかった。グループワークでの話し合いを通して、みんなの意見を聞くことができたのも知識を深められたことの一因だと思う。(F-4)

- 中杉の歴史の授業を初めて受けたときに、中学の授業では単なる出来事とその目的を先生の話と黒板で知るといった感じだったのが、出来事の前後の背景を元につながりを考える授業になったと思った。資料を読んでも、考えれば考えるほど難しくなっていく感覚最初は受け入れにくかったが、思ったことを書き出したら、なんとなくの流れが見えた。歴史は暗記もあるけどその過程で出来事を考えていくことが学びになると思った。(F-5)
- この1年間の歴総の授業で、中学校で習った同じ単元でも、それ以上に深い学びを得ることが出来たと思う。また、この中杉の歴総の「前の時代に起こったことを踏まえて何故そうなったのかを考える」という思考が、最初の頃は難しかったけど段々出来るようになっていった。(F-6)
- 私は写真を見て何かをイメージし理解することは得意だが、絵など写真以外のものからイメージを膨らますことは苦手だ。だから、写真のある近現代の歴史はものすごく面白く、予習の段階で様々な地紋が湧いてくるので、それを解決するために取り組む授業はとても面白かった。また、googleフォームで授業でやったことをまとめるのも、自分の頭の中が整理されてやりがいがあった。しかし、写真のない18-19世紀の歴史には興味を持つのが難しく、せっかく学習しても自分の中で腹落ちしていないという実感がある。ある先生が以前、“歴史は全体を見て部分を見る、それから部分を見て全体を見るのが重要”とおっしゃっていたが、まさにそのとおりだと思う。“賢者は歴史から学び、愚者は経験から学ぶ。”このことわざのように、未来に向けて私達も歴史からたくさんを学んでいきたい。

(F-7)

- ・一年間全体のことでないですが、ついこの前のベルリンの壁の映像がとても印象に残っています。正直なところ今まで学んでいた内容は自分にとって現実味がなく、なにかのストーリーを客観的に見て覚えているような感覚でした。ですがこの映像は人々の逃げる様子からリアルに起こったということがよく伝わりました。今まで写真の資料を無意識的に絵画と同じように感じてしまっていたことに気が付きました。そして映像の生々しい様子を見ることの大切さを感じました。(F-8)
- ・一年間通して、世界がどのように発展してきたかということが、これからより発展するためにどうすればいいかのヒントになっていると思います、そのような意味でもとても興味深い一年間となったと思います。戦争史などはまず今解決しなければいけない問題もあるが、これから世界大戦のような凄惨な大戦が起きないことや地球をだめにしないことなど、次の公共の知識を蓄えるとても重要な学びだと感じました。(F-9)
- ・歴史を学んでみて、どこか遠い話のように感じていたけれど、コロナやウクライナへの侵略戦争、東日本大震災もあったし、実はめちゃくちゃど中心付近にいるんだなと思った。(F-10)
- ・社会科は明確な答えのない問いも多いので面白かった。(F-11)

どの意見も、傾聴に値するものばかりである。D-1からD-8に共通していることは「グループワークを用いた歴史の学びは、十分機能する」ということである。また、「考えてから覚える」という過程を経ることによって、生徒が興味を持って物事を覚える契機になる可能性を見出せたことは大きな収穫である(もっとも、どれだけ知識が定着しているかは未知数だが)。なお、筆者はD-7で書かれた「僕はそこまで歴史という教科は得意ではなく、あまり好きな方でもなかったけど、グループワークなどを通すことで段々と興味が湧き、『もっと知りたい』という気持ちが出てくるようになりました」の一文を見たとき、

手応えを感じた。また、D-8で「教科書の太字のみが大事なのではなく、その理由が書いてある部分が大事なのだ」と実感した」と示されたように、「原因・経過・結果」のサイクルが大切であることを理解してくれたことに、胸をなでおろしている。歴史は、「ただただ覚えるだけのもの」ではないのだ。

一方、初年度の科目ということもあり、多くの課題が存在していることも承知している。そのため、自分自身への反省も込め、生徒からの声を多めに列挙した。その中でも、知識の定着、グループワークでの“ただ乗り”などは筆者も懸念していた点である。前者に関しては知識を確認する場を設けることで、後者についてはグループワークでの人数を減らす・問いの難易度を上げる形で解消できるのではないかと考えた。

また、歴史を学ぶこと、そのものについて考えてくれるものがあった。「歴史は暗記もあるけどその過程で出来事を考えていくことが学びになる」(F-5)のように歴史の学びを捉えてくれるなら、担当者冥利に尽きる。また、「社会科は明確な答えのない問いも多いので面白かった」(F-11)など、「答えのない問い」⁵について指摘があったことも筆者にとっては大きな収穫であった。

本稿で紹介した生徒の感想は、ほんの一部である。しかし、いずれもの射たものばかりである。すべての意見を授業に反映させることは難しいが、可能な限り、次年度以降の授業に反映させていきたい。そう思わせるものばかりであった⁶。

「座学からグループワークへ」というスローガンのもと、従来の授業形態を180度変える試みを実践したのが、2022年度の歴史総合の授業である。今後も、「自分で考え、発信する」取り組みを通して、生徒に歴史を学んでもらい

⁵ この「答えのない問い」という言葉は、2023年度の公共での最終レポートで生徒が示したものである。2023年度の公共の実践報告は、別の機会に譲りたい。

⁶ 参考までに、2023年度の公共では、①フォームに提出回数を少なくする、②課題レポート回数・題目の工程表を初回授業で示す「見える化」の実現、③1・2学期に「理解度確認テスト」を1回ずつ実施し知識の定着を図る、④簡単には解を導き出せない問いを設定し、グループワークでの全員の参加を促す。という形で、改善できる点は改善した。

たい。その際、「過去と現在の因果関係に着目」して、現在の世の中を考えてもらいたい。心の底からそう思える1年間の授業であった。筆者たちの心配とは裏腹に、60期の生徒が概ね好意的に受け入れてくれた。ありがとう。

【謝辞】2023年3月15日の立教大学社会福祉研究所のジェンダー・ファミリー研究会（通称GF研）にて、本稿の元となる報告をする機会に恵まれた。人生の先輩方から多くの助言をいただいたことに、御礼申し上げます。